

最終的にこのようにやってもらいたいとの意図のもとに援助を受ける場合には無償供与であってはならないということ、必ずそれは後で pay back するということを啓蒙することが必要ではないかと思えます。

最後に一言つけ加えますと、対外援助でぜひとも必要なことは技術援助で出かける方々の語学力ではないかと考えます。日本においても将来、技術援助を続けてゆくためには、若い技術者が語学の習得を十分にできるような方途を考えることがまず第一に必要なことではないかと思えます。

簡単ではございますが、ごあいさつのかわりと致します。

## 閉 会 の 辞

資源科学研究所理事長 安 芸 皎 一

二日間にわたり、皆様方から盛んな御討議をお願いできたことを厚く御礼申し上げます。こういう課題にはいろいろ意見があり、それぞれの分野で議論がなされていることと思えます。技術的さらには経済的協力、援助が拡大されてゆこうとする今、農林省と海外技術協力事業団と京都大学とで、こういう機会を持たれたことに心から敬意を表し、今後の御活躍を願う次第です。

私達は今、これまで経験しなかったような事態に直面し、新しい方法を投入しなければならない事情に迫られております。しかもそれは一方的な手段によっては解決がつかないということがわかってまいりました。その点で京都大学東南アジア研究センターの大学の機能を有効に使った活躍に期待するところが大きいと感じております。

このシンポジウムで提起されたものは、今後ともお互いの共通課題として皆様の御検討を期待する次第でございます。